

アベサンショウウオ

Hynobius abei Sato

有尾目サンショウウオ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧 I 類

国カテゴリー 絶滅危惧 I A 類

選定理由

生息地が人間の生活する場と重なっているため、都市化や開発による生息環境の悪化が進んでおり、絶滅の危機に瀕している。

形態

成体の全長86～127mm。一般にオスはメスより大きく、特にオスの尾長・最大尾高はメスに比べて大きい。繁殖期のオスは尾がひれ状になる。

国内分布

兵庫県但馬地方、京都府丹後地方、福井県北部・越前市西部・嶺南東部地方、石川県南加賀地方。

県内分布

小松市・能美市の一部に生息。

生態

産卵は12月中旬～1月上旬（成体は繁殖期以外には現れない）。卵嚢は透明なひも状で、外皮には縦の条線がある。幼生は2月中旬～下旬に孵化し、変態した幼体は7月下旬～8月上旬に上陸する。

生息地の条件

産卵場（標高35～150m）は二次林に接した休耕田脇の水路、沢筋の湿地、湿地化した放棄田、伏流水の出口部などで、いずれも緩やかな流れがある。

生存の危機

2004年12月～2008年3月の調査では、能美市と小松市をあわせて毎年約40対の卵嚢を観察した。発見できなかった卵嚢を考慮しても、本県に生息する成体の総個体数は200以内と思われ、産卵場の現況からみてこのまま推移すれば絶滅するおそれが大きい。（A）

特記事項

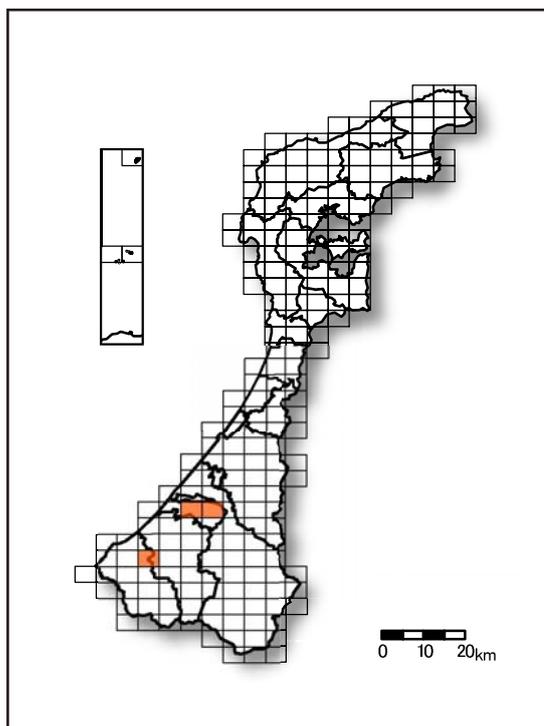
国内希少野生動植物種。これまでに卵嚢・幼生・成体のいずれかを確認したのは、能美市の6地域、小松市の10地域である。

参考文献

川内一憲ほか 2005. 両生類誌(15) : 22.
松井正文 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(爬虫類・両生類). p. 72-73. 自然環境研究センター.
宮崎光二 2008. いしかわ自然史(43) : 1.



写真提供者：宮崎光二



県内の分布

ホクリクサンショウウオ 有尾目サンショウウオ科

Hynobius takedai Matsui et Miyazaki

石川県カテゴリー 絶滅危惧 I 類

国カテゴリー 絶滅危惧 I B 類

選定理由

生息地が人間の生活する場と重なり合っているため、環境の影響を受けやすく都市化や開発のほか、過疎と高齢化による稲作の中止が産卵場の消滅に拍車をかけており、絶滅する危険性が高い。

形態

成体の全長80～120mm。オスはメスよりやや大きく、メスに比べて尾長が長く、後肢が太い。繁殖期のオスは尾がひれ状に伸長し、総排出腔の周辺部が膨大する。

国内分布

能登半島と富山県西部。

県内分布

かほく市以北の5市5町に生息。

生態

成体はふつう地中に潜み、繁殖期(一般に2～3月上旬)に産卵場に現れる。卵嚢は透明なひも状で、らせん形に巻く。1卵嚢中の卵数は30～70(平均45)。孵化してから約3年で性成熟する。

生息地の条件

産卵場(標高5～330m)は丘陵や山麓部にある二次林縁の小さな池、二次林縁に接した水田の溝、林道の側溝など湧水の溜まった日当たりのよい場所で、ごく緩やかな水流がある。

生存の危機

多くの産卵場で観察される卵嚢数は10対未満であり、このような小さな繁殖集団では最小存続可能個体数(Minimum Viable Population)を満たしていないと思われる。(A, B)

特記事項

羽咋市指定天然記念物。保全のために卵や成体を移植する場合、距離の離れた場所へ安易に導入することは避けなければならない。また一度だけの移植では定着率はきわめて低いのがふつうであり、その後のモニタリングが必要である。

参考文献

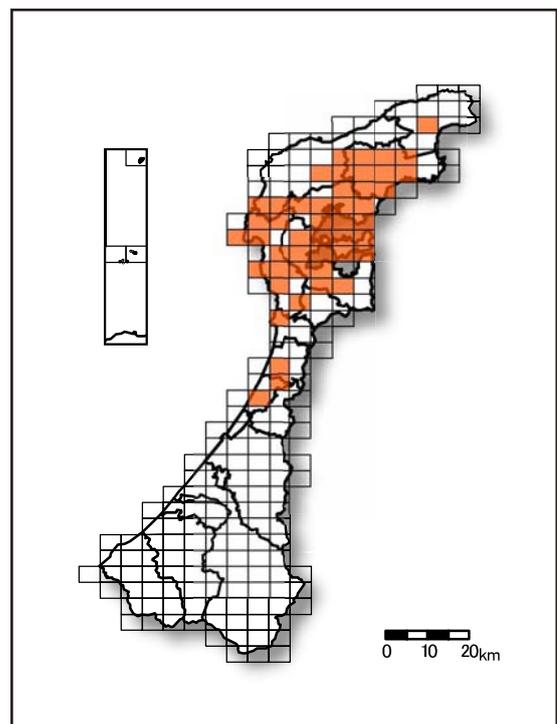
松井正文 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(爬虫類・両生類). p. 74-75. 自然環境研究センター.

Matsui, M. and K. Miyazaki 1984. Zool. Sci. 1:665-671.

宮崎光二・竹田俊雄 2000. 両生類誌(4): 18-22.



写真提供者: 宮崎光二



県内の分布

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus)

カメ目ウミガメ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類

選定理由

本州中部以南の砂浜海岸に上陸して産卵する唯一のウミガメであり、志賀町富来地区の増穂浦で産卵孵化したのが日本海側における北限記録となっている。

形態

甲長70～100cm。体色は赤褐色。頭部の前額板は5枚(4枚のことがある)、背甲の肋甲板は5対(4対や左右で異なることがある)。前肢にはふつつ2本のかぎ爪がある。子ガメは黒褐色で背甲も柔らかい。

国内分布

茨城県以南の太平洋岸および南西諸島に産卵場があり、その近海を中心に成体がみられる。

県内分布

これまでの採捕漂着記録では、春から夏に回遊してくる個体は甲長の大きい傾向があり、冬季は子ガメと幼体が多い。内灘、富来、門前、珠洲で産卵(孵化したのは内灘、富来)、片山津、門前で上陸が記録されている。

生態

日本で孵化した子ガメは黒潮に乗って北太平洋に運ばれゆっくりと成長し、その後北アメリカ沿岸にたどり着いて成体になると考えられる。しかし成長したカメがどのような経路で、何年後に日本に戻ってくるかは不詳。性成熟した個体は日本の沿岸で繁殖をくりかえすが、回遊の範囲はかなり広い。

生息地の条件

海水温は25℃前後が適温。石川県では孵化に適する砂中温度の保たれる期間が短いため、5、6月に産卵が行われ、8、9月の気温が平年より高くないと孵化できないのではないかと推定される。

生存の危機

上陸して産卵できるような暗く静かな砂浜海岸がきわめて少ない。産卵場の環境保護のためには、海浜への自動車の乗り入れ禁止や人工照明の軽減が必要である。(A)

特記事項

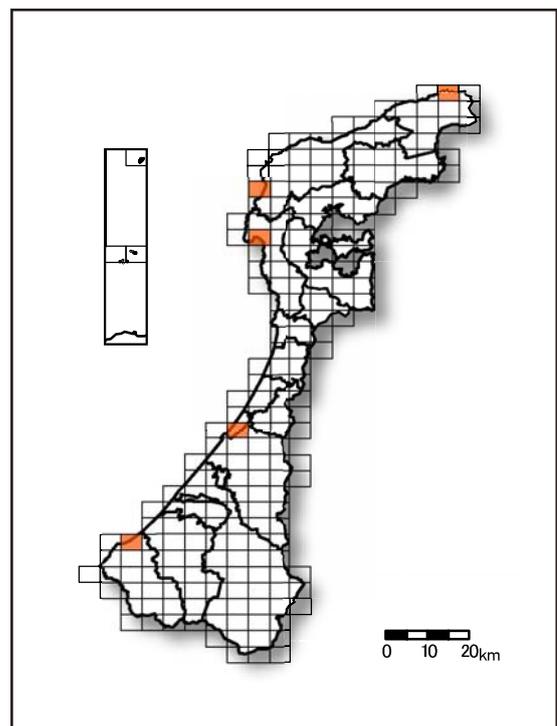
上陸産卵以外は人目にふれる機会が少ないため、海域での生態はまだ不明の部分が多い。

参考文献

内田至 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. p. 236-237. 日本水産資源保護協会.
亀崎直樹 1996. 日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. p. 56-58, 62. 平凡社.
徳本洋 1984. 両生爬虫類研究会誌(30):1-9.
松村初男 1996. 石川県の両生・爬虫類. p. 61-72. 石川県.
松村初男・山下郁 1996. のと海洋ふれあいセンター研究報告(2):29-38.



写真提供者: 松村初男



県内の分布

ナガレタゴガエル

Rana sakuraii Matsui et Matsui

無尾目アカガエル科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

県内では個体数が少なく、生息地である河川上流域の環境が悪化している。

形態

タゴガエルに似ているが、後肢のみずかきがよく発達しているので区別できる。成体の体長50mm前後。一般にメスはオスより大きい。繁殖期になると体側の皮膚がたるんでひだ状になり、特にオスでは著しい。

国内分布

本州中央部(近畿地方から関東地方まで断続的に分布)。

県内分布

大聖寺川上流部、動橋川上流部、大杉谷川、手取川水系の大日川、西俣谷川、尾添川、直海谷川、および犀川上流部で記録されている。

生態

成体はふつう山地の森林帯に生息している。晩秋になると溪流に集まり、水中で越冬する。早春の繁殖期には比較的深い水中の岩石の下に卵を産みつける。

生息地の条件

本県の生息地は、金沢市以南の標高200m～1140mの山地溪流とその周辺である。

生存の危機

山地溪流では堰堤工事や斜面の崩落、周辺森林の荒廃などによって生息環境が悪化している。(A)

特記事項

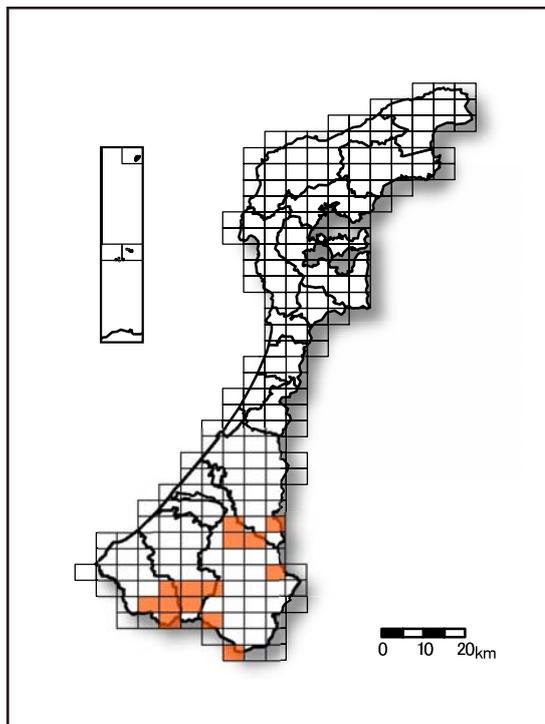
1978年に奥多摩で発見され、1990年に記載された種で、日本海側での産卵行動は調べられていない。2007年晩秋の調査では、河原や岸辺近くの水中にある石の下からオス成体が得られた。

参考文献

草野保・福山欣司 1996. Field Biologist 6(2):27-32.
前田憲男・松井正文 1999. 改訂版 日本カエル図鑑. p.68-71. 文一総合出版.
Matsui, T. and M. Matsui 1990. Herpetologica 46(1):78-85.



写真提供者:宮崎光二



県内の分布

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters

有鱗目ナミヘビ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由

夜行性の小型種なので目につきにくく、本県内での記録は少ない。本種の生息にはその地域の生物多様性がかかなり高いという指標的な意味があるが、開発による自然環境悪化によりその生息地が減少する危険性が高い。

形態

大きくなっても全長50cmほどの小さいヘビ。体表が真珠光沢をもち、全長35cm以上の個体では基色が黄褐色で、背の中央にある細い黒条が目立つ。しかし幼蛇は黒色味が強く、背面の黒条も目立たない。本州産のヘビでは本種以外は尾下板（尾の腹側の鱗）が対になって並んでいるが、本種では対になっておらず、1枚の鱗が並ぶだけである。

国内分布

北海道にはないが、これまでにほとんどの都府県から記録されている。また沿岸島からの報告はあるが、離島からの記録はない。日本固有種。

県内分布

加賀地方から能登半島基部まで分布記録が散在する。しかしまだ奥能登からの記録はない。白山では標高1000mあたりでの記録がある。

生態

目につきにくい種であるが、珍しいヘビということで、かえって人の注意をひき、記録される機会が多い。切り通しや崖の多い地域での発見頻度が高い。本種の鱗は他のヘビのように瓦をならべたようになっておらず、タイルを貼ったようになっていて、隙間に皮膚が露出しているため乾燥に弱く、徘徊中に夜明けとなり、乾燥死する例がときどき見られる。

生息地の条件

落葉層、腐葉土層が発達して、餌になるミミズの多い林地が適しているように思われる。

生存の危機

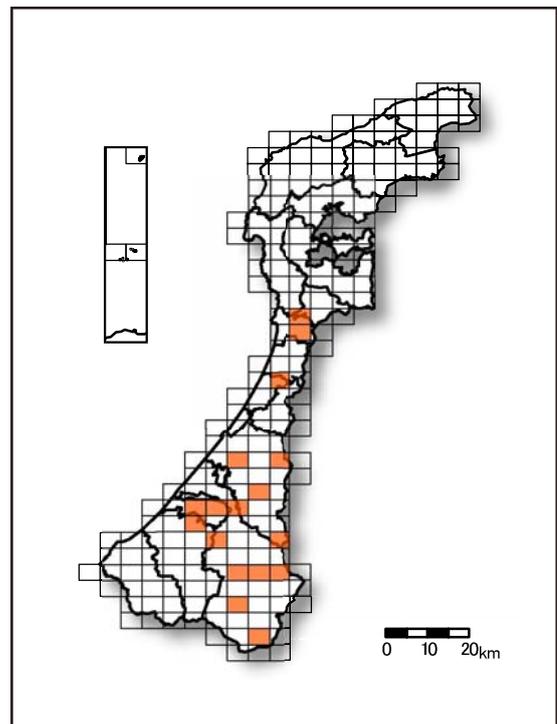
本種の生息密度が高かった金沢城址が公園化したために生息地としては消滅しようとしているように、開発による生息環境の悪化が各所で進んでいる。(A)

参考文献

千石正一(編) 1979. 原色/両生・爬虫類 p. 50. 家の光協会.
千石正一 1996. 日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類 p. 94-95. 平凡社
戸田光彦 1985. 石川県白山自然保護センター研究報告(12) : 67-69.



写真提供者: 徳本洋



県内の分布

シロマダラ

Dinodon orientale (Hilgendorf)

有鱗目ナミヘビ科

石川県カテゴリ 準絶滅危惧

国カテゴリ なし

選定理由

爬虫類食のヘビで生息個体数が本来少ない種だが、本種の存在はその地域の生物多様性がかなり高く保たれていることを示す指標性がある。本県内での分布記録が少なく、開発による自然環境悪化で生息可能地の減少が進んでいる。

形態

成体でも全長30～70cmほどの小さなヘビ。背面は淡褐色で50～60個の黒褐色の横斑が目立つ。成長にともなう斑紋の変化はあまりないが、幼蛇は背面の色が淡く白っぽいので黒褐色斑とのコントラストが成蛇よりも大きい。ただアオダイショウの幼蛇を本種と誤認することがあるので注意が必要である。アオダイショウはひとみが円形だが、本種のひとみは縦楕円形であることが判別の一つのポイントになる。

国内分布

北海道、本州、四国、九州や一部の離島。日本列島の古い固有種と考えられている。

県内分布

加賀地方から奥能登まで散発的に記録がある。白山でも標高2300mあたりでの記録がある。

生態

マダラヘビ類ではもっとも北に分布する種。物陰にひそむ性質が強く、夜行性である。普通はもっぱら爬虫類食でトカゲや小型のヘビを餌にしている。人に会って逃げられなくなると威嚇姿勢をとり、かみつことがあるが小さなヘビなのでたいしたことはない。

生息地の条件

不明であるが、餌になる爬虫類が生息できる自然環境のすぐれた場所が必要と思われる。

生存の危機

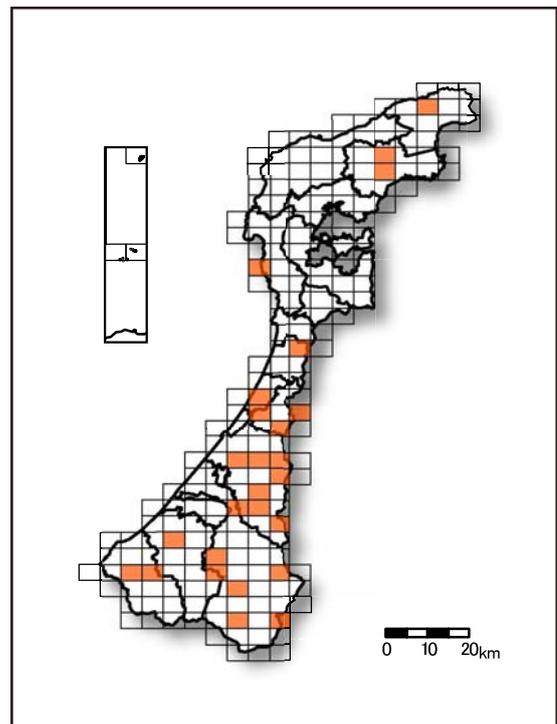
餌となる動物が開発によって減少する傾向が著しいので、生息域・生息数低下の進行が懸念される。(A)

参考文献

千石正一(編) 1979. 原色/両生・爬虫類 p. 68. 家の光協会.
戸田光彦 1992. 金沢大学理学部付属植物園年報(15): 17-23.
鳥羽通久 1996. 日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類 p. 91-92, 99. 平凡社



写真提供者: 徳本洋



県内の分布

ヒダサンショウウオ

Hynobius kimurae Dunn

有尾目サンショウウオ科

石川県カテゴリー 地域個体群

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由

邑知湯地溝帯以北では生息地が限られており、個体数も少ない。

形態

成体の全長10～15cm、紫色を帯びた褐色の地に小さな黄色の斑点をもつものが多い。卵嚢はバナナの実状で、虹色光沢のある外皮をもつ。

国内分布

山陰、近畿、中部、関東地方。日本海側では新潟県南西部が北限。

県内分布

加賀地方と能登地方南部(宝達山、石動山)には広く分布する。邑知地溝帯以北では眉丈山(中能登町)、赤蔵山(七尾市)、輪島市西南部、穴水町西部、能登町南部で記録がある。

生態

産卵期は2月下旬～4月下旬で、溪流の石の下に卵嚢を産みつける。多くの幼生は9月末までに変態を終えて上陸する。成体は繁殖の時期以外は産卵場に隣接した林の林床で生活する。

生息地の条件

産卵場になっている溪流だけではなく周辺にある森林の環境が良好な状態で維持されること。幼生の移動を妨げないように溪流の連続性が確保されること。

生存の危機

山地溪流の砂防堰堤工事、溪流周辺の山林の荒廃、森林伐採、林道整備などによって絶滅のおそれがある。(A)

特記事項

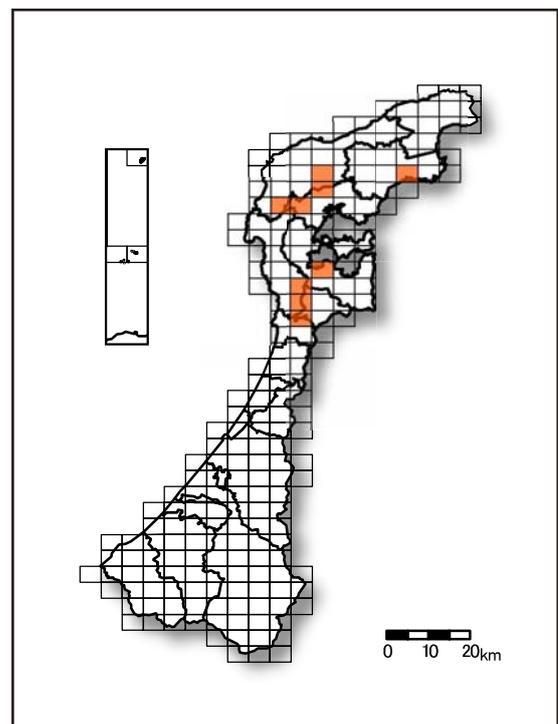
奥能登の生息地は緯度では本種の北限と思われる。遺伝化学的研究によれば、本州のヒダサンショウウオの個体群は大きく東部・中部・西部の3グループに分けられ、本県の個体群は中部グループに属する。

参考文献

環境省 2001. 生物多様性調査 動物分布調査報告書(両生類・爬虫類). p.40. 環境省.
松井正文・見澤康充 1996. 日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. p.18-19. 平凡社.
Matsui, M. et al 2000. Comp. Biochem. Physio. B 125:115-125.



写真提供者:宮崎光二



県内の分布